

昭和57年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)

埋蔵文化財発掘調査その2報告書

つち はし
土 橋 遺 跡

— 第 1 次 調 査 —

— 1 9 8 2 . 9 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

昭和57年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その2報告書

つち はし
土 橋 遺 跡

— 第 1 次 調 査 —

— 1 9 8 2 . 9 —

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会

序 文

国道1号線は、近年の産業構造の変化と共に交通渋滞を来し、袋井バイパスの建設は急務となっており、バイパス予定路線内の周知の遺跡は、板尻遺跡（古墳時代後期～奈良・平安時代）、烏居裏遺跡（弥生～古墳時代）、土橋遺跡（弥生時代）であります。

昭和55年度には板尻遺跡の第1次調査を行い、範囲を確定し、56・57年度には本格的な発掘調査を進め、多大な成果をみることができました。

昭和57年度からは土橋遺跡の発掘調査に入りました。4月から9月まで第1次調査を行い、範囲を確定し、10月より平面調査を進めることになりました。

ところで、袋井バイパスが必要不可欠なことであり、数多くの遺跡を避けて路線を決定することが難しいことであるとするれば、大切なことは、十分な調査を行い、記録を最大限残し、遺跡の性格を究明できるようにしておくことでありましょう。また、次代に継承すべき文化遺産は、精選され系統化されたものでなくてはなりません。遺跡・遺物という具体物が多く残されることによって、抽象化系統化された思考にも深みが増すのではないのでしょうか。

さて、路線内の分布の概略については、この概報でとらえられますが内容については今後の調査に待つことになりましょう。終わりになりましたが、調査の推進に適切なご指導をいただいた静岡県教育委員会文化課の先生方、建設省中部地方建設局浜松工事事務所の方々、酷暑の中で従事していただいた作業員、資料整理員、調査補助員のみなさん、調査にご協力ご支援をいただいた地元のみなさんに厚くお礼申し上げます。

昭和57年9月

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は昭和57年4月6日から同年9月30日まで実施した昭和57年度一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査その2〔土橋（つちはし）遺跡第1次発掘調査〕報告書である。
2. 本調査は、建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は寺田義昭、永井義博（袋井市教育委員会 社会教育課）を調査担当者とし、静岡県教育委員会文化課の指導を得て実施した。
4. 資料整理は寺田の指導のもと永井が行った。
5. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章第1節……………寺田義昭

第1章第2節～第3章……………永井義博

6. 本書の編集は永井が行ったが、編集の過程で多くの方々の協力、助言を得た。
7. 調査資料はすべて、袋井市教育委員会が保管している。
8. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
9. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。（敬称略）

松井一明（袋井市教育委員会）、山本宏司（土橋遺跡調査員）

渡辺菊男、大庭嘉平、大橋庄一、佐藤好孝、川島良一、鈴木嘉三郎、大庭千代子、大庭泰子、鈴木喜代子、寺田すぎ、大庭つや子、友田みさ子、寺田しま子、内山夏代子、大庭はつゑ、鈴木釘子、鈴木栄子、白井洋子、鈴木直子、寺田妙子、内山笑子、寺田健、横山利典、大場公彦、平田賢一、大場伸一

太田馬仔雄、高野由美子、森永明美、鈴木利枝、大庭京子、浅井征江、寺田せつ子

ここに記して深く感謝の意を表したい。

10. 本調査及び報告書の編集にあたって次の方々の協力を得た。（敬称略）

五島康司、吉岡伸夫、早川保子、兼子弘美、高木真澄、西尾玲子、榎田チエミ、坂尻遺跡調査事務所、磐田市立郷土館

目 次

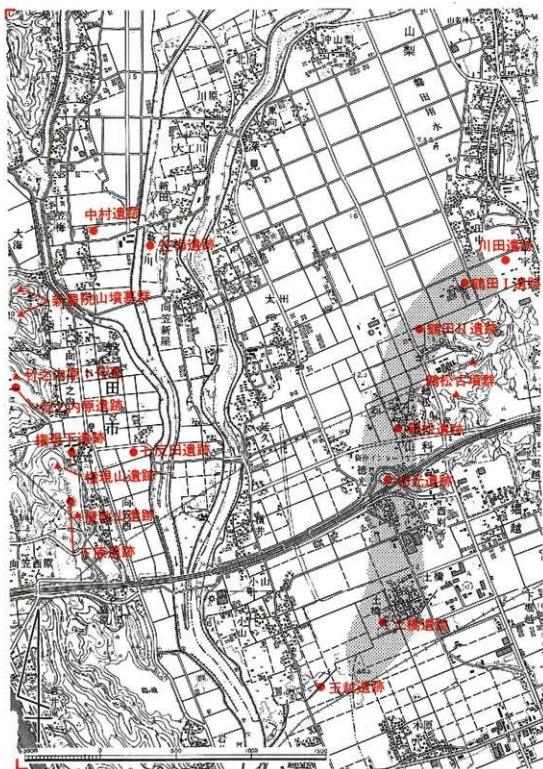
第1章 序 説.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 地理的環境・歴史的環境.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	3
第4節 調査の方法.....	6
第2章 道 跡.....	7
第1節 土 層 ・ 遺 構.....	7
第2節 出 土 遺 物.....	13
第3章 ま と め.....	16

挿 図 目 次

第1図	太山川中流域主要遺跡分布図		巻頭
第2図	中遠地域弥生時代遺跡分布図		2
第3図	土橋遺跡試掘調査トレンチ配置図		4
第4図	試掘トレンチ層柱状図		8
第5図	主要グリット平面図及び断面図		12
第6図	試掘調査出土土器実測図		14
第7図	土橋遺跡範囲確認図		15

図 版 目 次

- 図版第1 土橋遺跡周辺の地形
- 図版第2 土橋遺跡遠景（弊田原台地より）
土橋遺跡遠景（国道1号線より）
- 図版第3 土橋遺跡近景（東より）
土橋遺跡近景（蟹田川より）
- 図版第4 ハ区トレンチ完掘状態（東より）
ロ区・ハ区トレンチ完掘状態（西より）
- 図版第5 ホ区トレンチ完掘状態（東より）
ニ区トレンチ完掘状態（西より）
- 図版第6 ロ区表土掘削状況
湿地内での調査状況
- 図版第7 調査風景
トレンチ精査状況
- 図版第8 ト区-1トレンチ上面完掘状態
ハ区-5トレンチ完掘状態
- 図版第9 ハ区-11トレンチ完掘状態
ハ区-7トレンチ完掘状態
- 図版第10 ホ区-12トレンチ内 Pit 検出状態
ハ区-12トレンチ完掘状態
- 図版第11 SK4出土土器近景
黒書土器出土状態（その1）
- 図版第12 黒書土器出土状態（その2）
黒書土器出土状態（その3）



第1圖 太田川中流域主要遺跡分布圖

第1章 序 説

第1節 調査に至る経過

一般国道1号袋井バイパスが計画されたのはかなり以前からである。東名高速道路の開通による袋井インターチェンジへの出入りの車両、掛川バイパス・磐田バイパスの開通、製造業・運輸業の進出等により市内の道路交通量は年々増加の傾向を示して、各所で渋滞現象をおこしている。しかし、諸種の理由によって延びていたがようやく昭和53年に至りバイパス予定路線の袋井地区について埋蔵文化財の所在の有無の確認がなされた。周知の埋蔵文化財包蔵地は坂尻遺跡、鳥居裏遺跡、土橋遺跡の3ヶ所である。

建設省、県文化課との話し合いにより、昭和56年度から予定路線内の発掘調査に取り掛かった。坂尻遺跡の第1次調査である。56・57年度も発掘調査は進行中である。本遺跡からは多量の出土遺物、独立柱建物群が検出されるに及んで、律令時代の官衙跡であったろうと推定されるに至っている。国本（鳥居裏）遺跡については坂尻遺跡の調査が済み次第、第1次調査を行う予定である。

土橋遺跡については、56年度当初より発掘調査の対応が検討された。しかし、調査員の不足と坂尻遺跡の対応もあり、57年度より調査を推進することに結着した。調査予定は遺跡の内容にもよるが57、58、59年度の3ヶ年で終了する。対象範囲は県道浅羽山梨線より西側、蟹田川より東側である。特にこの地域については、袋井インターチェンジ取付道路までの渋滞を緩和するために、磐田バイパスより続けて早急に開通させなければならないからである。

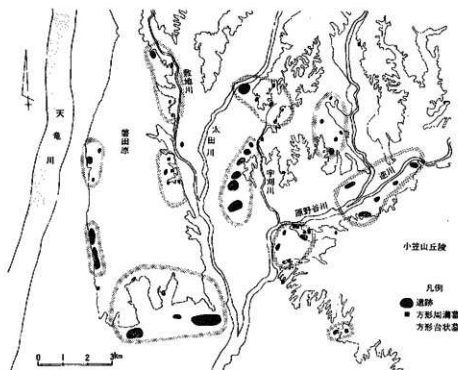
建設省中部地方建設局との契約はバイパス袋井地区ではあるが坂尻遺跡とは別途契約であり、また第1次調査と第2次調査とを切り離すことになった。そのため契約期間は4月6日より9月30日までである。

第2節 地理的環境・歴史的環境

土橋遺跡は、東名高速道路袋井インターチェンジの南約1kmの太田川の谷底平野のはば中央に位置する静岡県袋井市土橋字才別当外一帯に分布している。遺跡の西側には、周智郡春野町の春埜山（はるのさん）を源として南流する太田川が敷地川（しきじがわ）、小敷川（こやぶがわ）の水を集めて遠州灘へ注いでいる。さらに太田川の西には最大幅の4km、延長11kmの広大な磐田原台地が、遺跡の東側には油山可憐丘陵より派生した山塊がのびてきている。

遺跡の位置する沖積低地は、弥生時代中期より古墳時代、奈良・平安時代と常に人間の生産の場としてその足跡を各地に残している。

太田川流域でまず最初に成立したと考えられるのが鶴松遺跡である。鶴松遺跡は昭和47年より3回にわたって発掘調査がすすめられ、その様子が徐々に解明されようとしている。発掘さ



第2図 中遠地域弥生時代遺跡分布図(「掛の上遺跡II」より)

れた遺構は堅穴住居跡22、大溝、Pit群、土壌であるが、このうち白岩式の住居跡3、二之宮式の住居跡2、その他は菊川式の住居跡と見られている。大溝も白岩式から菊川式に至る各時代に掘削されており大雨のたび氾濫し流路を変える太田川に対してかなりの神経をつかっていたようである。現在の鶴松の集落は山足の残る高い位置にあるが遺跡はその西のかなり低湿な場所である。食糧生産のため天災を受けやすい低地へ進出し、可能な限りの排水施設、灌漑施設を整備し北へ南へと水田、集落を展開していく努力が推察できる。

鶴松遺跡を母体とする弥生時代中期後半の「ムラ」はやがて南へ徳光遺跡、土橋遺跡と、北へ鶴田Ⅰ遺跡、鶴田Ⅱ遺跡とその生活の場を広げていった。これらの「ムラ」はすべて鶴松遺跡より南北に伸びている低湿ながら帯状の微高地にある範囲をもって確認されている。これらの様相は各遺跡から採集された土器により鶴松遺跡(弥生時代中期～後期)、徳光遺跡(弥生時代後期)、土橋遺跡(弥生時代後期～古墳時代)、鶴田遺跡(弥生時代後期)というように肥沃な土地のもと漸移的に膨張する生産範囲を証明している。さらに磐田市向笠地区にも中村遺跡、笠梅遺跡(弥生時代後期後半)が出現することを付け加えておこう。

同時期に丘陵上に目を向けると、宇刈丘陵上には一色前田遺跡(弥生時代後期後半)をはじめとする数ヶ所の散布地が、また磐田原台地上にも弥生時代後期末～古墳時代前期の下原遺跡、東原遺跡、権理下遺跡、竹之内原遺跡などの集落跡が発見されている。一色前田遺跡は標高20m丘陵上の谷頭の約200㎡ほどの広さのところに堅穴式住居跡4軒とそれをU字形に囲む深さ1.5mのV型の溝が掘削されているいわゆる高畑性集落である。近日中に報告書が刊行される予定である。

前記の集落群に対応する墳墓としては近いところで丘陵上の鶴松古墳群の4号墳(台状墓)、配水施設と敷石をもつ同・C地区土墳墓、両小口部分に掘り込みをもつ同・E地区土墳墓などがある。これらは遺構内よりの出土遺物はないが、周辺から若干の弥生式土器片を検出しているため十分関連があるものと考えている。また鶴松遺跡の電々公社用地内の調査の時、溝状遺構よりブルーのガラス小玉を出土している。調査区が狭いためはっきりしないが周溝墓の可能性もある溝の配置である。鶴松遺跡をはじめとする集落群のつき当たった北端の丘陵上には春岡1号墓(後期前半・方形周溝墓)があるが、太田川の流路の変化により宇刈丘陵上の弥生時代遺跡群との関連も考えられる遺構である。

遺跡の西側の磐山原台地上にも新豊院山墳墓群をはじめ弥生時代中期から古墳時代にかけての遺跡が集中している。

新豊院山墳墓群は、弥生時代の土壇3基、古墳時代前期の台状墓1基、古墳時代前期の前方後円墳1基などを検出したD地点をはじめ、弥生時代中期からの造基地として土壇、方形周溝墓、台状墓、そして前方後円墳、円墳と多数の遺構を検出している。

さらにこの周辺には、弥生時代中期後葉の周溝墓である権現山1・2号墓や、弥生時代後期の台状墓である竹之内原1号墓があり、これらの墳墓群の調査者である柴田稔氏は磐山原の墳墓群と太田川流域の大規模な弥生集落群との関連を指摘されている。

奈良・平安時代の遺跡となると調査例は少なく、太田川流域では袋井市山梨の稲荷領家遺跡がある。ここは採集資料ながら、墨書土器、朱書土器、刀子、瓦などが出土しており今後の調査次第でさらに重要性を増してくるであろう。同じ国1バイパス関係で調査された板尻遺跡は試掘調査の段階から墨書土器「日根口」を出土し、第2次調査でも「×野樹」「玉郷長」「駅子」など役所名、職名を示すもの、「朽辺」「山科」など郷名・地名を示すもの、「千山」「浄主」など人名を想定できるものなど総数約200点が出土しており、郡衙・駅家など官衙跡として注目を集めている。その他の遺物としては、和同開珎3点、鍔帯具、銅印、分銅などの金属製品や文字の解読は不明ながら木簡も出土している。

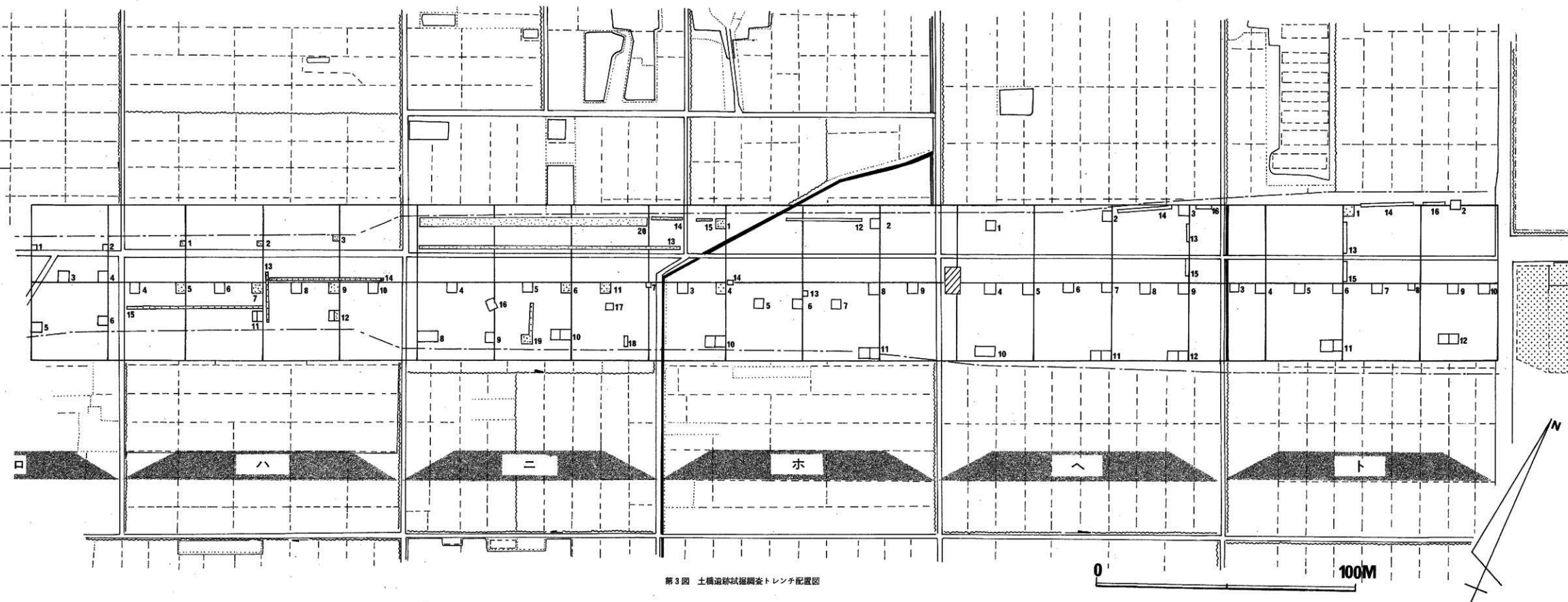
西側の磐田方面ではこの時期は盛行しており、遠江国分寺、同府台遺跡、石原遺跡などの古代寺院が造営され、また遠江国府の一部と推定される御殿・二之宮遺跡などが見付段丘の南端に登場してくる。御殿・二之宮遺跡のⅡ期の遺構・遺物は、雑舎・倉庫と考えられる掘立柱建物跡や溝跡から周囲の郷名、駅家関係の文字の解読できる木簡8点、朱書・墨書土器30点以上が検出されている。

中世・近世の遺跡に関しては、土橋遺跡周辺が東西交通及び森町や町山方面などへの通路となっていたため遺物の採集資料も多く、また発掘調査中にも出土した例が多数ある。

第3節 発掘調査の経過

4月～5月

発掘調査の準備期間。発掘調査用の基本杭設定をはじめ作業用配電盤設置、農耕地用排水路



第3図 土橋遺跡試掘調査トレンチ配置図

の設定を行い発掘調査に備える。また、発掘器材の準備、プレハブの建設等も併行して行い、作業員の募集、調査員・補助員の確保など調査体制の整備も進められた。

6月～7月

設定された基本測量杭によりトレンチを組んでいく。また土橋・熊野神社境内の水準点よりレベルを移動し、遺跡内各地にベンチマークを設定していく。6月中旬よりユンボを使用してトレンチ内の表土はぎを行う。福山通運西側のト区より蟹田川方面に向かって調査していく。今月はへ区、ト区を中心に実施し若干の出土遺物を確認した。とくに温室周辺では遺物の出土量が多く注目されるが遺構の検出はなされていない。センターのトレンチはすでに二区の調査に入っている。二区道北の精査、追加トレンチの調査も行われている。

8月～9月

完掘したトレンチより写真撮影。トレンチ位置図、断面図の作成。調査終了したトレンチより埋め戻しをしていく。第2次調査に備えて準備を開始する。

第4節 調査の方法

今回の調査ではバイパス建設のセンター軸を基準にして30m グリットを設定し、その中で15m 間隔にトレンチを入れた。また必要に応じて不明な地区にトレンチを追加した。基本的にトレンチは4×4m の正方形で、場所によっては長いトレンチを使用した部分もある。

地区名は第2次調査でアルファベットを使用することを考慮して「I」、「R」、「H」を使用し、第1次調査との混同をさけた。地区名は第2図のように割り当て、I区は予備のため使用せずR区から東へ向かってハニホへと地区名をあてた。トレンチ名は、各地区内で北西より1番とし、例えば「ハ 1」、「ニ-3」等のような呼称をとっている。ただし、地区によっては後に追加されたトレンチ名はこの法則にあてはまらないものがある。

調査は今回の対象範囲の東端である福山通運わきから開始した。事前に設定した4×4m のトレンチ内耕作土のみをユンボで排除し、水田床土より作業員にて排土した。各トレンチとも無遺物層の上面で遺構確認を行い、遺構の性格を明らかにするため一部トレンチ内で完掘した遺構もある。遺構の検出されていないトレンチでは深さ約2m まで掘り下げ土層確認を行った。

トレンチの位置はバイパス建設のセンター杭を基準にして設定した30m グリットを使用して図化した。また一部平板測量によって図化したものもある。トレンチ内の遺構は同じグリットポイントを使用して1/20にて実測した。また遺物の集中して出土した部分は1/10にて図化した。セクションは1/20にて図化した。部分的にその必要のないトレンチは柱状図で表した。標高はバイパス用地北側にある土橋・熊野神社境内にある静岡県1級水準点(L・9.532m)をベンチマークとして使用した。これは土橋遺跡に關係するすべての調査の基準となっている。

写真撮影については、大型カメラ(トヨビュー4×5)・中型カメラ(マミヤRB6×7)・小型カメラ(ニコンF・ニコンD E)計4台を使用し撮影条件にあわせて使い分けた。

第2章 遺 跡

第1節 土 層 ・ 遺 構

土橋遺跡は太田川左岸の川底平野に展開する微高地上に、弥生時代後期から古墳時代の集落跡及び水田跡の遺構が分布していると考えられている。調査区はこの中を東西570m、南北50mの範囲で設定されているため微高地と後背湿地が入りくんでかかってきている。遺跡内の基本土層は（泥層）、（砂層）、（礫層）からなっている。土橋遺跡では遺物包含層はほとんど見当たらず、無遺物層であるⅢ層上面が遺構確認面である。

遺構内の基本土層は

- | | |
|---------|---|
| Ⅰ層 耕作土 | 茶褐色粘土層 |
| Ⅱ層 水田床土 | 灰色粘土層 |
| Ⅲ層 無遺物層 | 東西570mの広い調査区のため、地区により青色粘土層、礫層、砂層、灰白色粘土層などさまざまである。 |

A、各地区の土層堆積

〔ロ区のトレンチ内の堆積状態〕

ロ区の農道南側は茶畑で、平均水田面より約2mの盛土がされている。Ⅰ層は茶畑の作土で、砂やジャリを含む褐色土層である。Ⅱ層は灰白色粘土ブロックや黄色土粒子を含む褐色土で、その下が砂をベースとして若干の黄色ブロックを含むⅢ層がつづいている。この付近は、蟹田川の自然堤防上で両岸とも茶園や畑がつづく一帯である。水田耕作土は検出されていないため、この区画内は荒地となっていた上に盛土して畑としたと思われる。無遺物層であるⅢ層上面を精査した結果、青色砂層の中に青白色粘土の覆土をもつ溝跡、七竈などが検出された。出土遺物は平安時代より江戸時代後半に至る土器片が出土している。地元の人の話によると、この付近に「金四郎が淵」、「ソブ池」と呼ばれる池があり埋め立てられているらしい。ロ区の西側より蟹田川までは急激にレベルが下がり沼地となっておりここがその池の跡と思われる。道の北側の水田のトレンチでも土器片が出土しており、このロ区を土橋遺跡の西限としておきたい。

〔ハ区のトレンチ内の堆積状態〕

ハ区は農道の北側も南側も水田で、東から西へゆるやかな傾斜をもち道の北と南では一段高さが異なっている。ハ区を横切る農道は水田面より1.5m高く、袋井市小山にある「かすみ堤」から東へ延びてくる堤防のつづきと言われ、太田川の氾濫より下の集落を守っていたとのことである。ハ区内は基本的に、Ⅰ層＝耕作土、Ⅱ層＝水田床土、Ⅲ層＝無遺物層となっている。

Ⅲ層＝無遺物層は場所により土質が異なっており、ハ区西側では砂質の黄白色粘土、中央では2cm大の砂礫層、東側では青色砂層となっている。上層は下より青色砂層、黄白色粘土層で、この両層を切るようにして砂礫層が堆積している。このⅢ層内に掘り込まれた中世～江戸時代の溝状遺構、弥生時代・古墳時代の土蔵、Pitの一部を検出している。

〔ニ区のトレンチ内の堆積状態〕

ニ区もハ区と同様、農道の北側と南側には若干のレベル差があり、南側は水田を作るときかなり削平したと言われている。そのため南側は北側に比べて遺構確認面が一枚下で青色砂質土層となっている。北側の遺構確認面は黄白色砂質土で、その上面でかなりの土器片が出土している。道路南側は水田の中に3ヶ所ほど茶畑が残っている。この茶畑は水田に高さ約1mで盛土をしたもので、明治初期の水田整備の時、水田内を削って高さをそろえ、その余った土を水田内へ積み上げて畑にしたとのことである。そのため、この盛土内からは新田より混ざった土器の小破片が多量に出土している。この付近は字名を井戸尻といい、あちこちに湧き地点があり低湿な場所である。ニ区の基本土層はⅠ層＝耕作土（茶褐色粘土）、Ⅱ層＝水田床土（灰色粘土層）、Ⅲ層＝無遺物層（上部灰色粘土層、下部青灰色砂層）となっている。

〔ホ区のトレンチ内の堆積状態〕

低湿な水田がひろがっている。中央に茶畑が高く残っている以外は1年中水のなくなることのない場所である。この区画内は、他の区画の最終面となっている土層がなく、かなり人為的な擾乱をうけているようである。他でⅠ層とされている土がここでは厚さ1m以上も堆積している場所もある。これは土地が低すぎるため、土を入れて埋め戻しているらしい。遺構遺物は西側の磐山用水の近くで弥生～古墳時代の土器が土壌内より出土している。

〔ヘ区のトレンチ内の堆積状態〕

ヘ区的基本的な上層はⅠ層＝耕作土（茶褐色粘土）、Ⅱ層＝水田床土（黄色土を多量に含む灰色粘土層）、Ⅲ層＝灰色土（1～5mmの有機質粒子や黄色粒を含む土）、Ⅳ層＝暗灰色土の堆積となっている。北側は高く、南に向かって下がりおり南端では1年中水がついている低湿地である。遺物、遺構はヘ区の北西部分であるセンターラインより北側で105ラインより東側の水田よりの出土が多い。しかし確実に遺構として押さえられるものはいへん少ない。

〔ト区のトレンチ内の堆積状態〕

ト区的基本的な上層はⅠ層＝耕作土（茶褐色粘土）、Ⅱ層＝水田床土（灰色土）、Ⅲ層＝暗灰色土の順に堆積している。この地区も北側の温室周辺のトレンチから土器片が出土している。センターのラインより南側のトレンチでは遺物はまったく発見されず、遺跡の状態としては温室の下から土橋の集落にかけてが中心となってくると思われる。出土遺物は耕作のためか、すべて小破片となっている。

B、各地区の代表的なトレンチの状態

〔ホ区-4のトレンチ〕

4×4m の正方形のトレンチで深さ約40cm のⅢ層の上面で遺構が確認されている。南側の一部を土層確認の深掘りで失っているが、溝状遺構1、Pit2、土壌1を検出している。どの遺構も確認面から遺構床面までは浅く、水田耕作によって遺構のかんりの部分を削平されたものと考えられる。遺構の性格は、Pit=掘立建築物の柱穴と思われ、土壌は弥生時代後期の壺と高坏の破片を出土している。溝については出土遺物がなく不明である。

〔ト区-1のトレンチ〕

メロン温室の東側に設定した4×4m の正方形のトレンチである。耕作土下40cm で溝状遺構2、土壌1、Pit3を検出している。遺構からの出土遺物がほとんどないためそれぞれの性格については不明点が多い。

〔ハ区-12のトレンチ〕

遺跡西側の水田の中へ設定した2×4m の長方形のトレンチである。耕作土下35cm で長軸85cm、短軸60cm、深さ5cm の土壌を検出している。この土壌は礫の多いⅢ層の中に掘り込まれており、覆土は黒褐色有機質土である。出土遺物は弥生時代後期の高坏の一部があり、この周辺に竪穴住居跡等がある可能性も出てきた。

〔ハ区-4のトレンチ〕

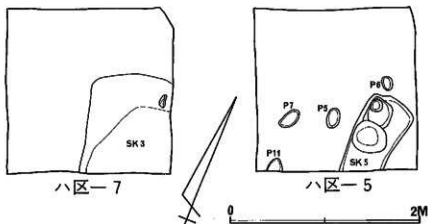
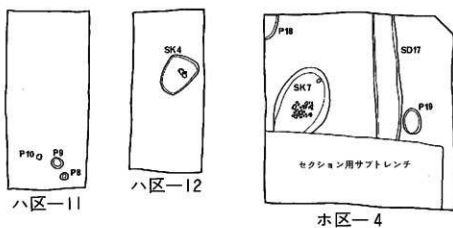
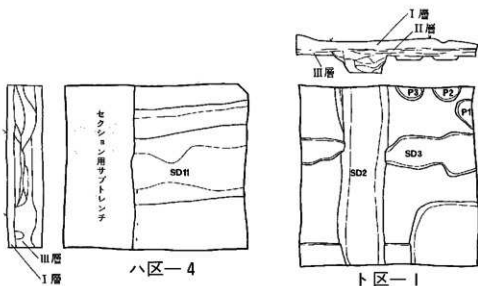
センターラインに添った4×4m のトレンチで、表土下40cm の深さで検出されている。トレンチ中央に東西にはしる溝状遺構は、青白色の粘土質の覆土をもち、杭列の一部が残っている。出土遺物より江戸時代頃の年代が与えられている。

〔ハ区-5のトレンチ〕

ハ区-4のトレンチの15m 東側に設定された4×4m のトレンチである。Pit4、土壌1を検出しており、土壌は何らかの貯蔵穴のようである。

〔ハ区-7のトレンチ〕

ハ区のほぼ中央に設定した4×4m のトレンチである。トレンチ東南コーナーに間丸の落ち込みが検出され掘り上げたところ若干の弥生式土器片、礫等が山出した。上部をかなり削平されているが竪穴状遺構らしい。

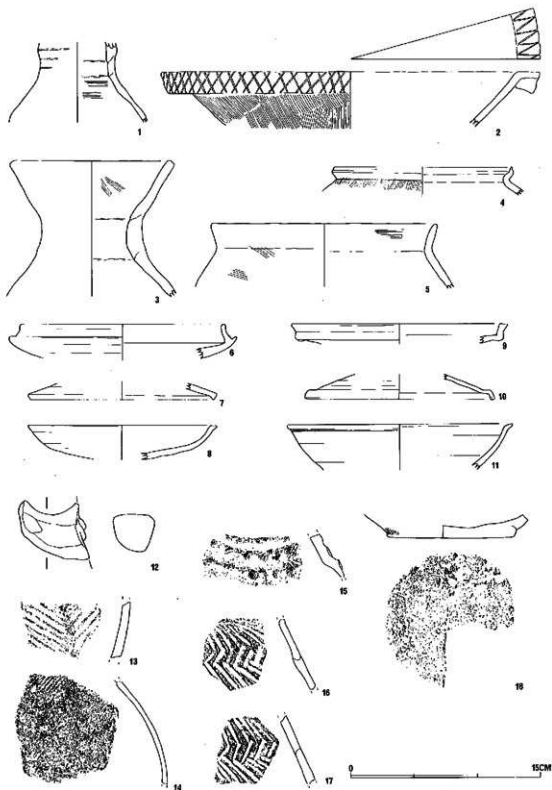


第5図 主要グリット平面図及び断面図

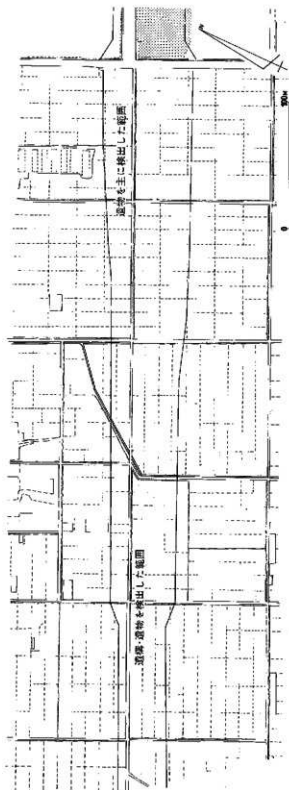
第2節 出土遺物

土橋遺跡の試掘調査で出土した土器は、弥生時代後期より古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世に至る各時代の遺物がみられる。これらは耕作土及び水田床土からも細片となって出土し、遺跡の広がりを知るうえで重要な手掛りとなったが、また反面遺構の上部がかなり破壊されているという不安も残す結果となった。また残存状態の良い資料については続いて実施される第2次調査で遺構を完掘した状態で記録できるため本調査ではなるべく遺物は取り上げず現状を保持した。そのため今回の資料は小片が多かったが参考のため第6図に示した。

1はハ区-12の土壌SK4から出土した壺形土器の頸部で三本の櫛押出横線文がわずかに見えるが、内外面とも摩滅している。2は、壺形土器の口縁部で折り返した口唇部には櫛状工具による刺突文が入りその他外面はハケ目が施されている。内面は摩滅していて不明である。ホ区-4の土壌SK7より出土している。3は壺形土器の口縁から頸部にかけての破片であるが内外面とも摩滅がひどく不明である。ハ区-7の土壌SK3より出土している。4はS字状口縁台付甕の小破片である。これは非常に薄い胴部にすどく外反するS字状口縁をもち、この口縁部には横方向のナデが施されている。わずかに残った胴部にはわずかにハケ目が残っているが表面の摩滅がひどく欠損部分が多いためこれ以上は不明である。周辺でS字状口縁台付甕を出土しているのは坂尻遺跡(袋井市)、御殿・二之宮遺跡、野原遺跡、七反田遺跡、長江崎遺跡(以上磐田市)、青木遺跡(浅羽町)などがある。5は甕の口縁部の小破片である。ハ区-7の土壌SK3より出土しているが内外面にわずかにハケ目の施されているのが確認できるほかは摩滅がはげしく不明である。6~11は須恵器の坏身・坏蓋であるがすべて小破片である。それぞれ口縁部がわずかに残るのみである。これらは二区の農道より北側の区画内より出土しており溝状遺構が何本か切り合っている覆土の上面からである。12は甕の把手部分のみの出土である。同じく二区農道の北側からでありこの区画が遺構分布が濃厚な地区である。13については水神平式土器の可能性がある。水神平式土器は一般的に壺形・甕形・鉢形土器を中心に行っているが、そのうち鉢形土器の胴部にあらう条痕を施した小破片と思われる。残念ながら本調査ではこの小破片1点のみであるため第2次調査以降の発掘成果を待ちたい。14は壺形土器の頸部から胴部にかけての小破片で胴部に縄文を施してある。15は壺形土器の胴部で有段になったところへ櫛状工具で羽状に刺突がされている。16・17については類例に乏しく不明である。18は壺形土器の底部で木葉痕が残っている。図示していないものでは木製農具の破片、陶磁器片などもある。また土器の中で二区の農道北側から溝状遺構の覆土上面より墨書土器が出土している。文字は「里人」、「里」、「大」などのほか墨痕が残るが解読できないものを含めて約10点ある。これらは第2次調査で詳しく報告することとして今回は出土状況の写真で示してあるので写真図版を参照されたい。



第 6 図 試掘調査出土土器実測図



第7図 土橋道跡範囲確認図

第3章 ま と め

以上、第1次調査の概要を記してきたが、当初の予想より若干異なった調査結果となってきた。

まず、土橋遺跡の範囲であるが表面観察には「静岡県遺跡地図・地名表」による広がりより第7図で示したとおりに変更となった。この範囲を見ると大きく2つに分かれているが、西側の範囲は土橋の集落、熊野神社から南西に延びる微高地上に位置し、旧太田川の自然堤防の1つの上の上のてきていていると思われる。さらにこの微高地を西に向かった磐田市下越地区にも遺跡があることが考えられ、北から川田-鶴田Ⅰ-鶴田Ⅱ-鶴松-徳光-土橋-玉越（仮称）とつづいてくる『遺跡ベルト』の一角に位置していることが明らかとなった。東側の範囲はやや新しい土器が多く、堀越地区の試掘の様子を見てからでないといこの一帯については予測がたてにくい。しかし、この2つの地区は必ず発掘調査を必要とするところであるので詳細は第2次調査の終了を待ってから述べることにしたい。

次に出土遺物の時期であるが、発掘資料からは弥生時代後期、古墳時代初頭～後半、奈良・平安時代、中世、近世、近代に至る遺物がある。低湿地であるため木製品の出土も予想される。対象面積がかなり広いため予想しない思わぬ遺物の出土があるかもしれないので細心の注意をもって発掘をすすめる必要があるだろう。特に黒書土器を出土するニ区道北、ニ区道南は重要であろう。

遺構としては低湿地のため各時期にわたって土壌、溝状遺構が多い。また、いくつか検出されている Pit は掘立柱建築物を、さらに住居跡、井戸跡など、古い時期では集落跡、水田跡関係の遺構が埋まっている可能性がある。新しい時期では交通史関係の遺構があるかもしれないと考えている。

〔参考文献・引用文献〕

- 1966 遠江考古学会 『大沢・川尻古窯跡調査報告書』
- 1973 磐田市教育委員会 『磐田市竹之内原古墳調査記録報告』
- 1974 静岡県 『静岡県の地質』
- 1978 静岡県教育出版社 『フィールドワーク 静岡の地学』
- 1979 静岡県教育委員会 『静岡県遺跡地図・地名表』
- 1980 向笠遺跡群研究会 『新豊院山遺跡（A-2・3地点）』
- 1981 磐田市教育委員会 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告』
- 1981 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書・板尻遺跡第1次調査一』
- 1982 袋井市教育委員会 『鶴松遺跡』
- 1982 袋井市教育委員会 『鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群』
- 1982 袋井市教育委員会 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報一板尻遺跡第2次調査一』
- 1982 磐田市教育委員会 『野原遺跡発掘調査概報』
- 1982 磐田市教育委員会 『新豊院山墳墓群』
- 1982 浅羽町教育委員会 『青木遺跡・馬場第1遺跡・西立遺跡』
- 1983 袋井市教育委員会 『掛の上遺跡Ⅱ』
- 1983 袋井市役所 『袋井市史一通史編一』

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査その2報告書

土橋遺跡—第1次調査—

1982年9月30日

編集・発行 静岡県袋井市教育委員会◎
袋井市国本3070の1

印刷所 株式会社 開明堂
浜松市川沢町1番1号



土橋遺跡周辺の地形（昭和54年12月撮影）



土橋遺跡遠景（磐田原台地より）



土橋遺跡遠景（国道1号線より）



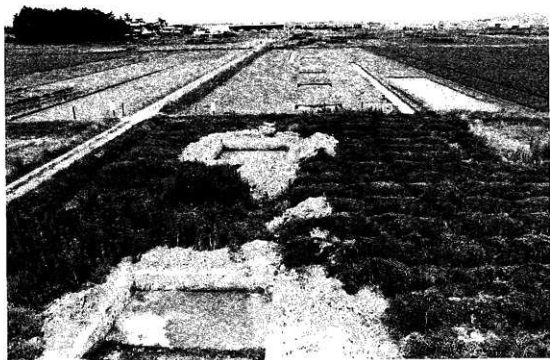
土橋遺跡近景（東より）



土橋遺跡近景（蟹田川より）



ハ区トレンチ完掘状態（東より）



ロ区・ハ区トレンチ完掘状態（西より）



ホ区トレンチ完掘状態（東より）



ニ区トレンチ完掘状態（西より）



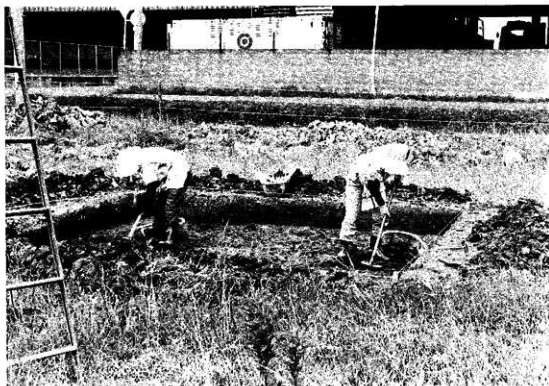
口区表土掘削状況



湿地内での調査状況



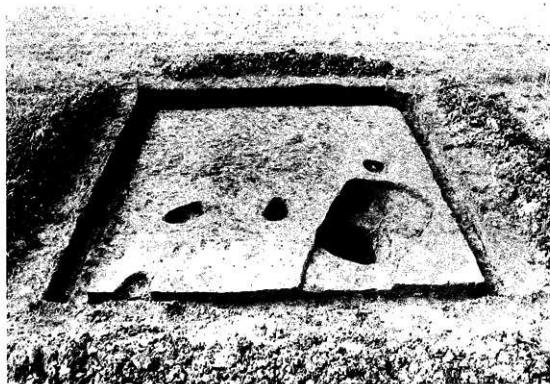
調査風景



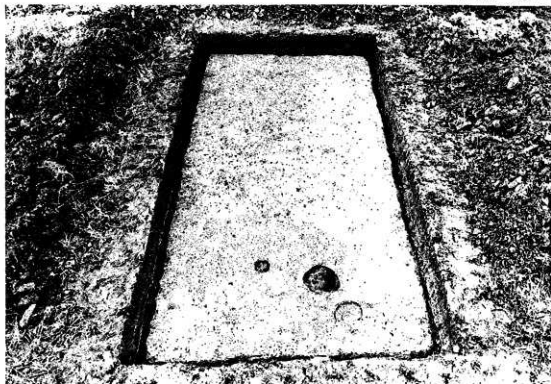
トレンチ精査状況



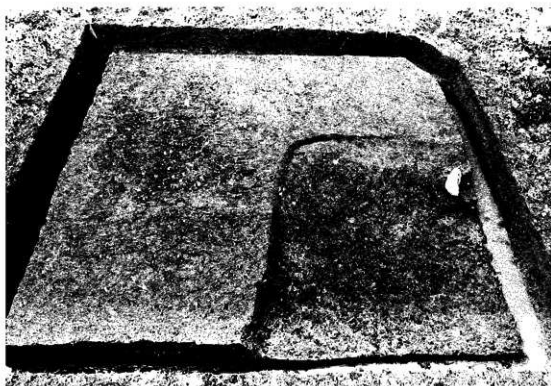
ト区-1 トレンチ上面完掘状態



ハ区-5 トレンチ完掘状態



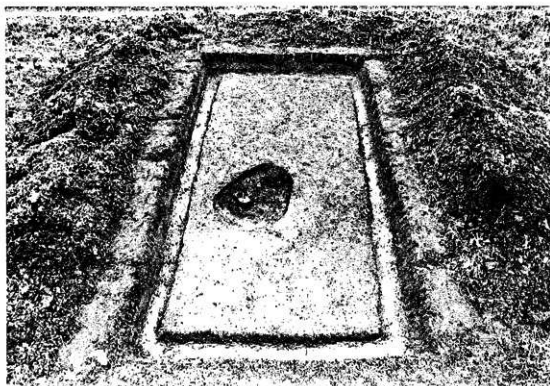
ハ区-11 トレンチ完掘状態



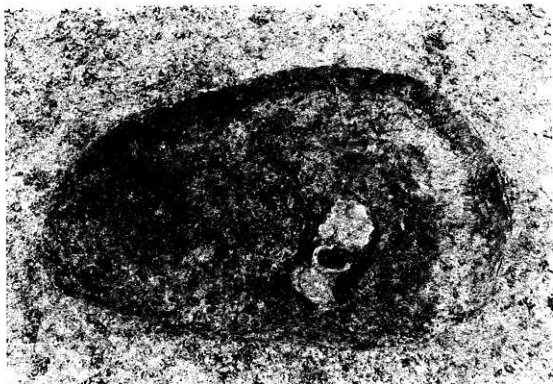
ハ区-7 トレンチ完掘状態



ホ区-12 トレンチ内Pit検出状態



ハ区-12 トレンチ完掘状態



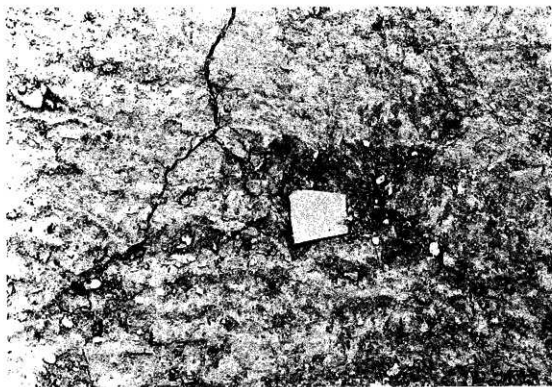
S K 4 出土土器近景



黒書土器出土状態 (その1)



黒書土器出土状態（その2）



黒書土器出土状態（その3）